

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：32623

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520310

研究課題名(和文)古・中英語期の女性像の受容と変容 e l f r i c のテキストと言語の基礎的研究

研究課題名(英文) Reception and Transformation of the Images of Women in Old and Middle English Literature -- Aelfric's Texts and Language

研究代表者

島崎 里子 (SHIMAZAKI, Satoko)

昭和女子大学・文学研究科・准教授

研究者番号：90276618

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では10世紀英国を代表する説教散文作家であるAelfricの特に女性を題材とする作品を取り上げ、語彙と作品構成の両面から彼独自の女性像の特徴を分析すると共に、当時の英国社会がラテン語原典社会の女性像を受容していく過程を検証した。

女性を題材とする古英語全作品を網羅的に調査し、写本、既存の刊本、ラテン語原典に関する最新情報を含む独自のデータベースを作成して、作品の題材となった女性とその系譜を整理した結果、Nativity of MaryについてAelfricとその後の作者不詳の作品群との間に明らかな系譜関係を認め、現存する3写本を厳密に比較対照してテキストの変遷を分析した。

研究成果の概要(英文)：This research analyzed Aelfric's distinctive manner in which he described women appeared in his homilies, with a special attention both to his vocabularies and narrative method. Moreover, on the basis of the analysis, the process where the Anglo-Saxon society had been accepting the images of women in his Latin sources was also explored.

For this purpose, first, all the Old English works theming women were collected and classified comprehensively. With this result, then, the original Database of Old English Works on Women was produced, which consists of the latest information about extant manuscripts, editions and Latin sources. Finally, close examination focusing on the chronological process of receiving and accepting the images of women in Old and early Middle English period was conducted, through the strict comparison of Nativity of Mary by Aelfric and those by his descendant anonymous authors.

研究分野：古代・中世英文学

キーワード：古英語 中英語 女性 Aelfric Katherine Group

1. 研究開始当初の背景

10世紀初頭から12世紀にかけての英国では、修道院の共通言語であるラテン語を十分に理解できない聖職者の増加に伴って英語による聖書や聖人伝への需要が高まり、多くのラテン語文献が英訳されていた。当時を代表する宗教散文作家であるÆlfricは、こうした需要に応えるように、ラテン語聖書や聖人伝の古英語訳を次々と制作した。しかし、ラテン語原典には、そのままでは英国文化に馴染まない内容が含まれることも多く、Ælfricの翻訳は、キリスト教の正統な教義の伝承を目的としながらも、同時に当時の様々な聴衆への影響や理解度に配慮して、原典の表現や内容を大幅に改変するというスタイルで貫かれ、逐語訳とは性質の全く異なる、彼自身の思想を反映した独自の作品であったと考えることができる。中でも彼の描く女性像は、大胆且つ巧みな改変によって、原典世界とは異なる、独自の特徴を備えている。ここでのÆlfricの改変は、原典で用いられている語を削除したり、逆に原典にはない語を独自に書き加えるといった語彙のレベルのみならず、女性が登場する場面設定や登場のタイミングを変更するなど、作品構成のレベルにおいても行われ、描かれる女性の性格に大きな影響を及ぼしている。このようなÆlfricの女性像への対応は、Wulfstanなど同時代の他の作家には見ることができず、注目に値するが、これまでほとんど指摘されてこなかった。

また、Ælfricは当時の英訳作品の多くに誤った教義が含まれていることを嘆き、中でもいわゆるnon-Ælfricianの作家たちの作品を異端的として攻撃する言動を随所で行っている。これらnon-Ælfricianの作家たちの作品の中で、特にÆlfricと同一の女性を題材とした作品に見られる女性像を、原典と共にÆlfricの場合と比較対照分析作業を行うことで、当時の英国社会がいかにヨーロッパ大陸(ラテン語原典世界)の女性像を受容し、それをどのような表現で自国の教会に集う多様な人々に伝えようとしたのかという、これまで見過されてきた当時の社会の興味深い様相を浮かび上がらせることが期待できる。

Ælfricの散文作品については、標準古英語の発達や散文の連続性、説教散文の伝統と系譜研究等の側面から、言語的・文化的、また通時的・共時的に、国内外を問わずこれまで多くの研究がなされてきた。語彙研究の分野でも、Ælfricとその一派が好んで選択的に用いた、いわゆるWinchester wordsの解明によって文語標準英語の発達史に一つの新しい局面が切り開かれ、また近年では、Ælfricが作品を執筆する際に参照したラテン語原典に関する詳細な研究(source studies)も飛躍的に進められている。一方、古英語期の女性については、1980年代後半から90年代にかけて、主にフェミニズムの観点から、これまで殆どその存在を語られることのなか

った当時の女性たちを、現代女性の視点で再評価する研究が相次いで発表されるようになった。しかし、これらの研究の関心の中心は、歴史の片隅に追いやられていた女性たちの発見とその再評価に留まっており、例えば、「古・中英語期という男性中心のキリスト教社会で、人々は実際に女性をどのように認識していたのか」というような、当時の社会通念を解明するような根源的な問いについて十分な解答を与えるには至っていない。このような問いに答えるためには、これまで個々に行われてきた言語研究やsource studiesの成果を女性研究と結びつけ、包括的な視野で問題を捉え直す姿勢が必要なのであり、そうした領域横断的な研究こそ喫緊の課題である。

2. 研究の目的

本研究は、これまで既に集中的に進めてきた古英語韻文における女性像の研究を、研究対象を古英語散文に拡げて継続・発展させることを目的とし、最終的な目標である「古・中英語期における女性像の受容と変容の研究」の一部として行うものである。

10世紀英国を代表する散文作家Ælfricの特に女性を題材とする作品を、ラテン語原典およびÆlfricが異端として攻撃したnon-Ælfricianの作家たちのテキストと厳密に比較対照し、語彙や作品構成の面からÆlfricの女性描写の特徴を検証する。従来、語学的アプローチの対象としてのみ扱われてきたÆlfric研究に新たな可能性を拓きつつ、10-12世紀英国における女性像の受容と変容の実態の一端を解明することを目指す。

3. 研究の方法

(1) まず、10-11世紀英国における女性像の受容と変容の実態を、系譜の側面から解明するための基礎資料として、女性というテーマに特化し、写本、既存の刊本、ラテン語原典に関する最新の情報を盛り込んだ、独自の古英語作品カタログ・データベースを編集作成する。

(2) 次に、(1)で作成したデータベース用い、ÆlfricとÆlfricが批判的であったnon-Ælfricianの作家たちが同一の女性を題材とした作品を抽出する。

(3) 続いて、それぞれのテキストにラテン語原典も加えて配置し、三者の異同を明確に示すことができるパラレルテキストを作成する。

(4) 最後に、完成したテキストを精査し、女性描写に着目しながら分析する。Ælfric独自の改変や語彙選択の傾向等を、non-Ælfricianの作家たちの作品の場合と、様々なレベルで比較対照することで、Ælfricの女性像の特徴を明らかにし、原典の女性像

が変容していく経過をたどる。

4. 研究成果

(1) 初年度である平成 24 年度は、課題研究の基盤整備として、女性を題材とする古英語散文作品のコーパスを網羅的に調査し、作品の分類作業を行った。作業を通じて、当時の女性像の受容の実態と系譜の全容についてのアウトラインを明らかにすると共に、女性というテーマに特化した古英語作品カタログ・データベースの作成に着手した。データベースには、写本、既存の刊本 (diplomatic edition の有無)、ラテン語原典、その他参考文献等の項目に関する最新の情報を盛り込んでいる。

同時に、Ælfric の『聖人伝』の中に含まれる 8 名の女性聖人を題材とする散文作品の中から、St Æthelthryth について、古英語訳テキストをラテン語原典 (Beda) と比較対照したパラレルテキストの trial version を作成し、作品構成を中心とする分析を行った。

具体的には、まず、原典とされる Beda のラテン語による『英国教会史』所収の女王エセルスリスの物語を、主として作品構成に着目しながら古英語訳との間で比較対照を行なった。その結果、Ælfric が行った主な改変は、物語の簡略化、話者の変更、時間軸の変更、説教化、社会規範や通念の反映、の 5 つの特徴に集約されることを示した。

また、Beda が記述した 8 世紀当時の英国修道院社会の規範や通念について、200 年後の Ælfric は、その後の社会の変化 (特に女性をめぐる社会規範の変化) を受ける形で、原典に修正を施しながら古英語訳を行ったと考えられることを、Beda のテキストから削除された記述を詳細に検証することで明らかにした。

Ælfric は、当時の社会に流布していた誤った教えを正し、人々にキリスト教の正統な教義を伝えるという明確な目的を持って、ラテン語原典の古英語訳を行っていた。しかし、彼には聴衆の多くを占める平信徒の需要に応えることもまた求められており、翻訳作業は、しばしばこの両者の妥協の上に成り立っていた。Ælfric の古英語訳には、原典にはない、聴衆への配慮を強く感じさせる加筆がしばしば認められる。特に、Ælfric が既婚の女性聖人 (St Cecilia, St Bassilissa, St Dalia) を取り上げているのは、Beda がこの 3 名を無視しているのとは対照的であり、彼が純潔の至上性と結婚の両立について強い関心を抱いていたことを示す手がかりの一つと考えられることを指摘した。

Ælfric の既婚の聖人伝 (virgin spouses) については、これまでにまとまった研究はほとんどなされておらず、今後の研究によって発展が期待できる興味深いテーマである。

以上の研究成果については、論文「Ælfric の女性聖人-St Æthelthryth をめぐって」、『昭和女子大学女性文化研究所紀要』第 40

号、1-14 (2013) に掲載した。

(2) 平成 25 年度は、前年度に作成した女性というテーマに特化した古英語作品カタログ・データベースを完成させると共に、そこで得られたデータを分析し、当時の女性像の受容の実態と系譜を明らかにする作業に着手した。

まず、女性を題材とした古英語韻文および散文作品、更に Ælfric の散文作品と内容的にそれと関連が認められる他の古英語作品を抽出し、系譜関係を意識しながらグルーピングを行った。作業の結果、内容的な関連や明確な系譜が認められる作品の数は限られていることが明らかとなった。

次に、それらの作品内に描かれる女性像の比較分析を行い、各作品の女性像の特徴を明らかにしながら、Ælfric の女性描写の独自性について検証を試みた。

具体的には、旧約聖書外典の Book of Judith に描かれる Judith 像が、ギリシャ語訳、ラテン語訳を経て古英語期の英国に渡り、古英語訳でどのように変容を遂げ、受容されたのかをそれぞれのテキストの当該箇所を比較対照して検証を行った。その結果、Ælfric の古英語訳に見る Judith 像は、原典や他の同時代の古英語作品と比べて女性性を感じさせる語彙や表現が削られる傾向が見受けられ、Ælfric が女性像を意図的に抽象化して描いた可能性を指摘することができる。

これらの成果は、論文「Anglo-Saxon Attitudes towards Judith -- Aldhelm, the Judith-poet and Ælfric」、『昭和女子大学女性文化研究所紀要』第 41 号、1-12 (2014) に掲載した。

(3) 最終年度である平成 26 年度は、前年度までに完成させたデータベースを用いて、テーマとして同一の女性を扱った、Ælfric 作品、彼の同時代作品、およびその後の作者不詳の作品群との間の系譜関係をより詳細に調査した。

その結果、Nativity of Mary (「マリアの誕生の物語」) を題材とする一連の散文作品について、Ælfric 作品およびそこから発展したと推測される作者不詳の作品群との間に系譜関係があることを発見した。

聖母マリアの誕生と幼少期を伝える Nativity of Mary は、ラテン語の『偽マタイ福音書』を経て英国に伝播し、遅くとも 9 世紀には聖職者の間で広く読まれていたが、英訳が現れるのは 11 世紀のことである。Ælfric は、このテーマが異端である危険を認め、当初この祝日のための執筆を避けたものの、後に正統派の権威に沿った説教を著して聖職者に指針を示すという、やや複雑な態度を取っている。Ælfric とラテン語原典、および作者不詳の作品群について、テキストの詳細な比較を行うことで、Ælfric の表現の特徴を検証しつつ、他の説教作者たちの作品について

も個々の特徴やそれぞれの相違を明らかにし、更には、当時の Mary をめぐるテキストの受容過程についても検証することを目指した。

これらの目的のために、11世紀から12世紀にかけて制作された Nativity of Mary の現存する3写本 (MS Hatton 114, MS Bodley 343, Corpus Christy College MS 376) について diplomatic text を作成し、それぞれの対応行を並べて配置した独自の diplomatic parallel text を編纂した。3写本の差異を精査することで、テキストの伝播や言語の発達の様相および各写本の特徴や傾向をも明らかにすることができる。また、これら作品群の既存のテキスト (Assmann (1898), Butcher (1997), Clayton (1998)) との比較検証作業も行って、主として Assmann (1898) のテキストについて修正提案を行った。

ここで作成した diplomatic parallel text および既存の刊本との比較検証の成果は、論文「古英語期における Nativity of Mary の受容について -- A Three-Manuscript Diplomatic Parallel Text of the Old English Anonymous Nativity of Mary, Trial Version」、『昭和女子大学女性文化研究所紀要』第42号、1-34 (2015) に掲載すると共に、昭和女子大学学術機関リポジトリ (<https://swu.repo.nii.ac.jp>) に公開した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

島崎里子、古英語期における Nativity of Mary の受容について -- A Three-Manuscript Diplomatic Parallel Text of the Old English Anonymous Nativity of Mary, Trial Version、昭和女子大学女性文化研究所紀要、査読あり、42号、2015、1-34

Satoko Shimazaki、Anglo-Saxon Attitudes towards Judith -- Aldhelm, the Judith-poet and Ælfric、Bulletin of the Institute of Women's Culture, Showa Women's University、査読あり、41号、2014、1-11

島崎里子、Ælfric の女性聖人 -- St Æthelthryth をめぐって、昭和女子大学女性文化研究所紀要、査読あり、40号、2013、1-14

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

Satoko Shimazaki et. al.、Peter Lang、*Sawles Warde and the Wooing Group: Parallel Texts with Notes and Wordlists*、

2015、170

〔産業財産権〕
出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

島崎 里子 (SHIMAZAKI, Satoko)
昭和女子大学・文学研究科・准教授
研究者番号：90276618